

ここ1, 2年の研究報告のあらまし 丸 井 文 男

(1) 自閉児に関する一連の研究

自閉症候群をもつ子供たちについて、グループで、研究をはじめ、丁度10年目になる。今年の春から、いままでの成果を中心に、集大成し、一つのくぎりにしようと考え、グループでまとめつつあるが、年内には、発行される予定である。この自閉児の治療研究をはじめてから、臨床心理相談室は、自閉症候群をもつ子どもの来所が中心になってしまったくらい、多くの事例にめぐまれている。

従って、治療をとおして、的確な状態像の推移を把握し、新しい診断的な手がかりを得ようとしたねらいは、グループのメンバーの着実な経験の積みかさねと、努力によって、研究条件には、めぐまれてきて、事例の数も限界に達しているほどである。ただわれわれの従来の研究の目標とするところは、単なる大学内の施設における遊戯治療の場における状況にとどまらず、母親への面接、指導をとおして家庭における養育の問題にも十分ウェイトをかけてきたが、しかし、就園期、就学期を迎えて子どもたちが当面する問題は、集団生活への参加の問題であり、大学の研究室からとび出して、直接、個別の子どもたちを受け入れる園や学校の教師へのかかわりをつよめたことは、今日までの研究のすすめ方としては、最も意義の多いものであると考えることが出来る。治療を継続し、経過を観察し、同時に、症状の推移を綿密に把握することによって、新しい診断体系を確立するねらいは、更に若干の年月を必要とするけれども、園や学校における集団適応の研究が、近年の統一研究テーマであったことは、われわれのような考え方で自閉児の治療教育にとり組んできた面からみると、当然のこととはいえ、現場の教育と、われわれの研究的視点とが合致した点で評価されうるものと考えている。

なお、今後、まだ、数多くのテーマがのこされており、それに対する追求、解明の意欲はつよいが、仲仲、時間的に雑用におわれて、すすみにくいが、この諸点を上げて自らへのはげましにもしたい。要点だけにとどめるが、

一つは、自閉症候群の状態像とその症候の消長との組合せからの診断の基準と、新しい類型化の確立である。更に、もう一つは、成因論と、症状発生の大脳の生理及び生化学的機序との連関性である。成因については、多様な見解がなされているが、いずれ、少し、大胆ともいえる考え方をまとめようと思っている。

なお、昭和53年度、54年度と2年間に亘って、厚生省の障害児関係の研究費も得ることが出来たので、更に、集団適応を地域社会との関連の分野へも拡大していこうとするテーマもすすめつつあるところである。

(2) 青年期の精神健康に関する研究

これも、従来からの長期的テーマであり、中心は、事例の研究である。たまたま共通第1次試験の実施の方策、計画、試行研究と、既に7年間もかかわってきたので、これらの入試改善と、現代の日本の高校生及び大学生のそれぞれの学校、大学における問題がいかに、個々に影響を与えているかを、巨視的及び微視的の両面から、アプローチの方法を新たに検査しているところである。教育学部における共同研究「60年代の教育に関する研究」には、障害児の問題で参加しているが、このテーマも、教育制度、行政的にも、高校の在り方、大学の現状について、学生の側から、再検査を加えるべき課題であろう。

(3) ここ三、四年前より、愛知、及び名古屋市の児童福祉審議会にもかかわって来、産休明け保育、障害児保育の在り方にも、社会的責任の立場から、若干の力をそえてきた。現今のわれわれの障害児の研究にしても、高校生、大学生の人間的な成長や屈折の状況の分析にしても、社会の現象から、真空ではありえない、in vivoとしてとりくむことを今後も常に考えてゆきたい。

(4) なお、現在、4冊の書籍の発刊に当面し、学内雑用との間で、苦悩している。

来年度の報告には、新しい展開を述べることの出来るのを自らに期待したい。